
私と彼との出会いそして再会

まーた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私と彼との出会いそして再会

【Nコード】

N4453N

【作者名】

まーた

【あらすじ】

タイトル通りのお話。設定とか、ストーリーとかは特に無く、なんとなく書いたものですので、駄文です。それでも、構わないという方はどうぞ。

（前書き）

見る気になってくれ、ありがとうございます。

S i d e
やなぎあや 矢崎綾

午後3時。 4月12日。

小学一年生になって約一周間が過ぎたあたりには、もう友達と言える人が数人でき、帰りの際に一緒に帰るのが普通だが、1人で帰っている少女がいた。

「今日も、友達が出来なかったなあ」

綾は独り言でそういう。とは言え、綾が友達とっていないだけで相手の方はそう思っている人も少数だがいる。

しかし、綾は恥ずかし屋で、まともに同じ小学生と目が合わせられず、会話にならないのである。

「うー、出来ないよお」

当たり前だが、誰にでも恥ずかしいという訳ではない。家族とは、何の問題無く話せる。近所でお世話になっている人にも一応話せる。まあ、恥ずかしがっていると言えば、恥ずかしがっているのだが。しかし、たった一週間前に出会ったばかりの人間に話しかけるなん

て綾には、とても難しいのである。

少し大きめの公園の方を見てみると、ベンチに座っている1人の少年がいた。

特に、何もしている事は無く、ただ、座っていた。

「今日もいるんだ。あの男の子」

綾は数日前から、この少年の事を見ていた。

お話しようかな？ でも、恥ずかしいから無理だし
と、綾はこの少年を見て毎回このように思っているが、恥ずかしい
という理由で、綾はそうできずにいた。

「よし、恥ずかしいけど、頑張ろう。……………そう言えば、何を
話せばいいのかな？」

今日こそは、と奮闘する綾だったが肝心なことに気が付き、「うー
ん」と唸る。

その時、その少年が立ちあがり歩き始めた。綾のいる方向にだ。
その事に気が付いていない綾は、いまだに何を言つか考えていた。
少年が歩き始めて数十歩で、もう綾の目の前まで近付いていた。そ
れでも、綾は気が付いていなかった。

“どうしよう？
どうやって話しかけようかな？”

「おい」

“いつもこの場所にいるけど、学校にいつてるの？……ダメ。何か偉そうだし、男の子が何て私の事を思うか分からないし”

綾はいまだに考えごとをしていて、少年のことには気がつかない。

そこで、その少年は綾の肩に触れる。

“アレ？ さっきより男の子が近くにいます？ ……肩に触れてる？”

綾は、これはどういうことか考える。

そして、答えがたどり着き、その直後の行動は

「ええええええ！？」

取りあえず、叫ぶということだった。

“ええええええええええ！！
何で、ここにいるの？ さっきまでベ
ンチで座ってたと思うけど”

「え、えと、その……………」

突然、現れた少年に即座の対応が出来ずに慌てる綾。

「落ち着け。落ち着かなければ、何が言いたいか分からない」

「うん。…………ふうー」

「それで、俺に何の用だ？」

「え？」

「え？ では無い。お前、俺の事を前から見ていただろう。だから、何か言いたい事があるのかと聞いたんだ」

“み、見られてたんだ”

と、綾は心の中で呟いた。

そして、何て言えば分からない筈なのに、気がつけば綾は大きな声で

「私とお友達になってください！」

と言った。すると、男の子が目を見開き驚いていた。

“いきなり大きな声をだしたことで驚いちゃったのかな？ でも、こんな大声でいうことは無かったのにい”

驚いた少年は、すぐに冷静さを取り戻した。

「俺とか？ まあ、俺の奴にそんなことを言うとはな。……いいぞ。友達になってやる」

「本当？」

「ああ」

「やったーーーーー！」

またもや、大きな声で言ってしまったが、先程とは違い、嬉しさの方が勝り恥ずかしさが無かった。

そして、この日。

綾と少年は『友達』になった。

それから、11年後。

S i d e 綾

現在、午前7時40分。

「あー！ もう、何で起きられなかったのかなー！？ 遅刻しちゃ
う！」

家で急ぎながら学校に行く支度をしている綾がいた。
バスが出発する時間まで、残り5分。そしてそれが、遅刻しない時間のギリギリのバスである。

バッグの中を見て忘れ物があるかどうかを確認するといった行動は行わず、制服に着替え、
とある物を手に付け終え、玄関から出る。

“バスの時間が後1分!!”

バス停までの距離は、約300メートル。ギリギリ間に合うかどうかの時間の為、全力で走る。そして、バス停までの道で最後の角を曲がる。しかし、そこには人がいた。

“ごめんなさい!!”

そしてぶつかる綾と男の人。

綾がぶつかった反動で尻もちをつく。すぐさま男の人は綾に手を伸ばす。

「すまない。まさか、人がいるとは思わなかったんだ」

「い、いえ、私が走っていたのがいけないんです。本当に申し訳あ

りません。……ありがとうございます」

綾は男の人の手を取り、立ち上がる。

「ところで、バスはいいのか？ もう行ってしまったが」

「え？」

男の人に言われてバスを見てみると、言われた通りにバスはもう行ってしまうていた。

その事実には溜め息を吐く。溜め息を吐いた後で、綾はぶつかってしまった男の人を見る。すると、違和感があった。何故なら、その男の人は綾と同じ制服を着ていたからだ。

「失礼ですが、学園の生徒ですか？」

「一応、そうだな。今日から、学園の生徒になる」

今日から、という言葉聞いて綾は、転校生？ と疑問に思ったので聞いてみると

「転校生という訳ではないが……新入生と言った方が正しいかもしれない」

と、意味不明な事を言ってきた。何故なら、新入生とは基本1年生の事をさすが、この男の人が付けているネクタイの色は黒色。黒色のネクタイは 学園の三年生をいう事を刺すからである。

当然、綾が理解できる筈も無く、少し考えてみることにしたが、結局理解不能のまままで終わってしまった。

「それで、君も 学園の生徒なのだろう？」

「はい。そうですけど」

「俺は、今日初めてという訳ではないが、久しぶりにこの町に来た。しかし、どうも道に迷ったらしい。……済まない。言いたい事が分かりにくかったな。簡単に言うと、俺と一緒に 学園まで行って欲しいという事だ」

男の人は本当に申し訳なさそうにそう言う。

しかし、綾はお人好しなので

「あ、そうなんですか。全然構いませんよ」

綾はそう言って早速歩き始めるが、男の人が付いてこなかったのもので、その足を止めた。

「あの、どうかしたんですか？」

「すまないが、1つ質問させて貰っていいか？」

「構いませんけど」

「じゃあ、聞く。そのブレスレッドはいつから付けている？」

男の人は綾が今日の朝に付けたブレスレッドを指さして言うてくる。このブレスレッドはある時、あの少年に貰った物だ。そして、何も言わずに消えた少年。

このブレスレッドは、少年が消えた日から付けなかった日は無かったと言ってもいいほどに綾は大切にしている。この質問に対して疑問を感じたが正直に答える。

「これは、11年前に貰った物で、それからずっと付けていますね」

「……………そうか」

質問の答えに対して簡単にそれだけ言うと、「では、案内を頼む」と言い、それ以降無言になった。綾は何故さっきのような質問をしたのか聞きたかったが、無言になったしまったので聞けず、学園に着いた。

しかし、綾は知らない男の人の口元が笑っていた事に。

「ここが、 学園か。どうも、案内ありがとう」

着いたと途端、そう言って学園の奥に行ってしまった。

「んー、クールな人だったなあ。……って、そんなこと言ってる場合じゃない！ できる限り早く教室に行かないと」

あの男の人に対して感じる事を言った綾だったが、遅刻していることを思い出した綾はできる限り怒られないようにと、走って教室に向かった。

教室に着くと、緊急のH Rのようなものを行っていた。

「ああ、矢崎さん。新入生の案内ありがとうね」

「はい？」

てつきり、怒られると思っていたのだが、予想していたのとは真逆で、礼を言われてしまった。

“新入生の案内？ ……ああ！ さっきの人のことか。となると、あの人にぶつかって良かったと言っべきなのかな？”

そんな結論にたどり着いた綾は自分の席に座る。しかし、また1つの疑問が浮かんだ。

“でも、どうやって私が案内したことを知ったのかな？ あの人から聞くにも、私の名前を知ってないと無理だし”

この疑問に対して考える綾だったが

「では、新入生が来ているので呼びますね」

その一言で、考えることを中断する。教室がざわめき扉が開く。

“やっぱり、さっきの人だ”

そこから入って来たのは、さっきまで綾といた人物を同じだった。

“名前なんていうのかな？”

と疑問に思うが、その疑問の答えを綾は既に知っている。

答えを既に知っている者は、この世界とは意外と狭いものなんだな
と思っている。

答えを既に知っている者は、あれから、ずっと付けてくれていたの
か。と思っている。

答えを既に知っている者は、随分と久しぶりなのだ。な。 と思ってい
る。

答えを既に知っている者は、これから起こる出来事は大抵予測でき
るな。 と思っている。

そして、その答えを既に知っている者の名前は

「初めましてでは無い奴もいるが、初めましてと言っておこう。

俺の名前は『橘雅』たちはなみやびだ。これからよろしく」

橘雅と言う。

「ええええええええ！」

そつ彼こそが11年前、綾と『友達』になった本人である。

そして、彼と彼女の物語は再び再開する。

（後書き）

いやー、スランプから抜け出すために書いてみたのですが、なんてクオリティの低さだろう

それに、何か空白の11年間とかできちゃったし。まあ、そこは書かなくてもいいかな？

クオリティが低すぎて、何て言えば分からないですNE

リリなのの方と比べ書きやすかったのですが、雅のキャラが全然出て無いなあwww

よし！ こうなったら、これの続きの物語をいつか書こう！
え？ と言ってる事が違うって？ そんなの気にしない気にしない。
い。

……すみません。なんかへんなテンションになっています。
今回はこの辺で失礼します。

最後に一言。申し訳ありませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453n/>

私と彼との出会いそして再会

2010年10月8日14時25分発行